

第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 「「かたち」再考—開かれた語りのために—」(④企11-13-1/1)

文化財の概念が多様化している昨今、いかに文化財の魅力的に伝えていくかという問題は大きな課題となっている。企画情報部では、西洋から受容した、近代的な「美術」や「美術史」の枠組みを解きほぐそうという意図のもとに、美術・考古・建築のみならず、芸能・文学といった「かたち」がないとみなされるものも考察対象に入れて「かたち」をとらえ直してみようと試みた。本シンポジウムの成果の一つとしては、近代になってから絵画・彫刻といったジャンルに分類されたものを、相互につながっていた本来の姿に、いかにもどすべきかという課題が浮かび上がったことが挙げられる。

1月10日(金)は趣旨説明・基調講演(対談)・セッション1で4名の研究発表、11日(土)は、セッション2・セッション3でそれぞれ4名の研究発表を行った。最終日の12日(日)は、登壇者全員と専門委員とでラウンドテーブル形式のディスカッションを行った。参加者へのアンケート調査では、「大いに満足」70.8%、「満足」25.0%、「普通」4.2%、「普通」0%、「無回答」4.2%という結果であり、回答者の過半数に満足感を得たことが判明した。

日程：2014(平成26)年1月10日(金)～12日(日)、会場：東京文化財研究所 セミナー室
参加者は1日目134名、2日目126名、3日目52名(含：発表者)であった。

[プログラム]

趣旨説明：「今、なぜ「かたち」なのか」 皿井舞(東京文化財研究所)

基調対談：「生まれてくる〈かたち〉」 イケムラレイコ(アーティスト)・田中淳(東京文化財研究所)

【セッション1】群れとしての「かたち」：セッション趣旨説明 江村知子(東京文化財研究所)

サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所)

「先史時代からみた「かたち」の概念—土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」

高桑いづみ(東京文化財研究所)「「くり返す」ということ—音楽の「かたち」と変化する伝承—」

ユキオ・リピット(ハーバード大学)「蟠龍図の「かたち」と行為」

小沢朝江(東海大学)「近代日本の行在所にみる様式の創造」

セッション討議 司会：江村知子(東京文化財研究所)、荒川正明(学習院大学)

【セッション2】個としての「かたち」：セッション趣旨説明 塩谷純(東京文化財研究所)

小林達朗(東京文化財研究所)「美しい術—国宝千手観音像の場合」

内呂博之(金沢21世紀美術館)「「かたち」への挑戦—岡田三郎助と藤田嗣治」

大島徹也(愛知県美術館)

「ポロックをポロックとして見る—ジャクソン・ポロックのオールオーバーのボード絵画」

渡部泰明(東京大学)「歌の〈かたち〉—源俊頼の方法」

セッション討議 司会：塩谷純(東京文化財研究所)、藤川哲(山口大学)

【セッション3】「かたち」を支えるもの：セッション趣旨説明 綿田稔(東京文化財研究所)

メラニー・トレーデ(ハイデルベルグ大学)「八幡縁起のローカリゼーション」

崔公鎬(韓国伝統文化大学校)「器—社会的形態・文明の記憶」(通訳：稲葉真以/韓国光云大学)

塚本麿充(東京国立博物館)

「中国絵画史における「人格」と「かたち」—呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」

桑木野幸司(大阪大学)

「記憶のかたち—コスマ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」

セッション討議 司会：綿田稔(東京文化財研究所)、佐藤直樹(東京芸術大学)

【ラウンドテーブル(総合討議)】 司会：田中淳、山梨絵美子(以上、東京文化財研究所)